

## ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(10)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月24日に行われたロンドン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

The Classical Source

Ateş Orga

### パーヴォ・ヤルヴィが 武満《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》、ラフマニノフの《交響曲 第2番》を指揮、ソル・ガベッタがシューマンの《チェロ協奏曲》を演奏

1926年に設立されたNHK交響楽団は、首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィのもと、タリン、ロンドン、パリ、ベルリン、ウィーン、ケルン、ドルトムント、ブリュッセル、アムステルダムと、西欧をめぐる演奏会ツアーを開催中である。前回のロンドン公演や、ビデオや映像中継からわかるように、彼らはよく訓練されたアンサンブルであり、礼儀作法を心得ており、自らの伝統と様式を持ち合わせており、セクションごとの甲乙もつけがたい。弦楽器は素晴らしい。黄金の糸、最上の絹のようで、テヌートは密度が濃く、輝く美しい音を持ち合わせている。しかし、彼らが持ち合わせる木管の透明感や、金管楽器のなめらかで豊かな音色なしでは何の意味もなくなってしまう。パーカッションは時間を切り刻むと言うよりもピンで止めるようである。兵站学と調教が芸術へと進化し、コンサートマスターの篠崎「マロ」史紀のカリスマ的な姿は、銀白の鎧をまとった戦士のようにもあり(ちなみに彼はイヴリー・ギトリス門下である)、全てを統括していた。

日英文化年間2019-20の一環として始まったこの演奏会は、静かに始まり、静かな曲目が続き、静かなアンコールによって締めくくられた。聴衆は特に前半で、困惑させられ、背筋を伸ばさせられていた。武満徹の《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》(1991)は、題名をエミリー・ディキンソンの詩から取った作品だが、7音からなるモチーフの周りを周回するような作品で、作曲家の言葉を借りれば、「波や風のような、循環する円」を形作っており、「それぞれの反復で、姿を微妙に変えていった」。ヤルヴィはNHK交響楽団とともに、RCA Red Sealから武満徹作品集のCDをリリースしたばかりであるが、彼はこの作品に日本のオリエンタリズムに紛れもなくみられる雰囲気と色彩を見出していた。「武満は決して終わることのないモチーフを聴かせてくれます。終わることができないのです」と彼は言う。12分ほどの作品には、身振りの小さな指揮により、音色と想像、船と水たまり、風変わりなきらめきといった一連のシーンを浮かび上がらせた。これらは風景を思い起こさ

せ、リヤードフやドビュッシーを遠くに連想させる。そして、クレッシェンドのあと、地平線へと消えていった。ヤルヴィが率いる奏者たちの静かな音像のスペクトルの中でのリスクを引き受ける覚悟、精密なバランス、揺らぐことない信念……このオーケストラによって、我々は命や時間といった概念を描くことすらできるのだ。

シューマンの1850年の《チェロ協奏曲》は、メンデルスゾーンと同じやり方でつなぎ合わされ、最後に(伴奏付きの)カデンツァを伴う3楽章からなり、名人芸の披瀝を目的としない作品である。動きが慎み深く、オーケストラと呼吸が合い、ヤルヴィと同様に音楽の動向と噛み合ったボディー・ランゲージを示す今回のソリスト、ソル・ガベッタは、熟慮された解釈を披露してくれた。特に魂のこもった美しさを見せた、緩徐楽章が最も良かった。室内楽的な楽器の相互作用はしっかりと織り込まれており、トゥッティー撃がただ通過するだけ、という点にとどまっていた。とはいえ、総合すると、シューマンの反復音形や上行するうねりのすべてに注意が向けられていたわけではないし、チェロのために仕える伴奏に重きをおくことは、もちろんその意図は理解できるし必要だとは思いますが、不透明さをもたらしてしまった。ガベッタのアンコールはペテリス・ヴァスクスの《チェロのための本》(1978)より〈ドルチッシモ〉だった。この楽曲は彼女のお気に入り、(ヴォカリーズすらも)完璧な優雅さと純粹さを保つ左手は、指板の上を有史以前の生き物のように震えたりうねったりしていた。

ヴァイオリンはアンティフォナ的に分割され、チェロは真ん中に、コントラバスは左に、という配置で演奏された、NHK交響楽団の全楽器によるラフマニノフ《交響曲 第2番》のヤルヴィの楽曲解釈は、鋼というよりも叙情的で広々とした草原や星々といったものを探求するものだった。カット無し、第1楽章の提示部は繰り返し、地に足のついたクライマックス、ゆったりとしたルバート、極上の音色と表現力、音楽の1ページ1ページをなだめたり慈しんだりするようなパノラマ的光景。派手派手しさ、攻撃的な金管、大げさな、強調させられたデューナーミク、過度な感情— これらが冒頭で明らかになったことであるが、私達が聴きたいと思っていたものではなかった。たとえば、バレンタイン・デーの花束が、アダージョ楽章に見られたとしても。見るべき部分は、第1楽章のアレグロの第一主題で聴かれた、三小節でおこるリタルダンドとア・テンポであろう。速度を増した前の段階に戻る、節度のあるカデンツァは、カランドの本質だ。ゲシュトップ奏法による展開部のホルンと、それに引き続く、アクセントのつけられた、何度も繰り返される拍を外れたリズムは、予想だにできなかったことではあるが、シューベルトのハ長調の大協奏曲を思い起こさせた。スケルツォはメノ・モッツォによるフガートのお手本のようにあり、私が聴いたこの楽章の中で最良のものだった。弦楽器はそれぞれ拍感がしっかりしており、ほつれ的一端すら見せず、ヤルヴィは緊張感をはらんだ指揮を繰り返していた。グロッケンシュピール奏者はフレージングとニュアンスの面に注意を

しっかり払っていた。第3楽章は輝かしいカンタービレのクラリネット独奏(松本健司(原文は伊藤圭))が蕩けるようであった。終結部は詩情に富んでおり、ミシュランの三ツ星級だった。最終楽章は鐘の音と磨かれた拍車のようなイメージを抱き、締めくくりは華やかに巨大な感情や轟くような栄光へ舞い上がるようだった。いつまでも心のなかに残り、思い出してしまうような演奏だった。

2月24日はエストニアの独立記念日だった。優雅なアンコール曲として演奏されたのは、ヤルヴィの同国人であり、エドゥアルド・トゥビンとアルヴォ・ペルトの師であるヘイノ・エツレル(1887-1970)による《祖国の調べ》であった。1918年にピアノのために書かれ、1945年に改訂され、1953年に弦楽合奏のために編曲された楽曲である。素晴らしい演奏で、ほとんど完璧としか言いようがなかった。祈りの静けさはホールに沈黙をもたらし、パーヴォもその沈黙をすぐに破ろうとはしなかった。